

# 吾輩ハ猫ニナル

# 横山悠太

ある日わたくしの数少ない友人である馬さんが家へひょっとくりに遣ってきて、自分の今の日本語の水準にして辞書をほとんど使わなくとも読み進められるような小説があるならば、是非とも紹介してほしいと云うのでした。近來の日本の小説は片仮名で表された外来語が多く用いられており、それは馬さんにとっては呪文か暗号のようにしか読めないと言っています。そしてそれは日本語を学ぶ中国人にとって、共通の悩みでもあるそうなのです。このことは日本語を母語とするわたくし共にとっては、容易には気付かないことでありました。なるほど、中国人から見ただけの日本語というのはそのように映るのだな、とわたくしにはそのことが大変面白く思えました。ご年配の方が電化製品の取扱説明書を慣れない片仮名と格闘しながら読み解いていく感覚、と似たようなものでしょうか。

彼と日本語で談話している限り、わたくしは彼がわたくし以上に日本語の言葉をよく知っているようにも感じられましたし、「されば」「とまれ」「いわんや」「ずんば」などの高句が会話中に無理なく口から出てくるような人は、彼以外には日本人でさえ出会ったことがありませんでしたから、彼のその要求はわたくしにとって全くもって意外なことでした。彼の年齢はわたくしより一回り上なのですが、大学生の頃か

ら独学で日本語を学び始め、日本へは一度も行ったことがないのだそうです。それだけにこれだけの日本語が話せるというのですから、全くの驚きであります。

わたくしは迷わず、それなら一昔前に書かれた小説を読めばよいですよ、と数冊の文庫本を本棚から無造作に引き抜いて彼に貸してやりました。うちの本棚に並んでいる本のほとんどはそういうものでしたから、都合のよいことだったのです。

三日後、再び馬さんが遣ってきて、うちへ上がるなり靴からわたくしの貸した本を取り出しました。ずいぶんと速読なのか、それともわたくしの貸した本が彼の嗜好に合わなかったのだろうか、などと憶測しましたが、彼はこのように云ったのです。片仮名が少ないのはよいが、今度は言葉や表現が古く、こちら中国でも使わなくなったような時代遅れの漢語が出てきて、読むに堪えない、夏なんとかという作家の書いたものなどは漢字の使い方からして出鱈目である、ああいいうのを中国語では「馬馬虎虎」と云うのだ、と。

わたくしは面前で我が国を代表するほどの某作家を侮辱されていい気はしませんでした、同時にふとあることを思いつきました。しかし、それはあまりに荒唐無稽で、突飛で、それこそ「馬馬虎虎」なことでしたから、わたくしは馬さんにそのことを伝えずにおきました。わたくし自身もそれはあくまでただの思いつきで、まさかそれを実行に移す日が来るとは思いませんでした。

それから半年後、上海では万国博覧会が真つ盛り of 時期でした。わたくしは三度目の失業を経験しました。期せずして時間がぼっかり空いてしまった自分は、最初のうちは何をやるにも面倒でただうつつとした日々を過ごすばかりでした。気分転換に黄山でも登りにいってみようかと思いましたが、ありませんでしたが、その頃の天気は朝方晴れていたかと思えば午後から急に雨模様となったり、晴れたら晴れたで今度は息をするのも苦しいほどの蒸し暑さになったりで、いつの間にか外へ出るのも億劫な体になってしまっていたのでした。床に投げ出されたままの中国語の教科書は手に取る気にもなりませんでしたが、読書でもしようと思っても家にある本は全て読んでしまっていましたし、靴下の穴も全て針と糸で塞いでしまっていましたので、もう何もすることが見つかりませんでした。本来なら早く新しい就職先を探すところですが、それもやはり生来の面倒臭がりから、しばらくお預けにしておきたいと思ってしまうのでした。ときが来れば仕事のほうからわたくしを探しに遣ってくるだろう、とのんびりなことを云っていました。こうしてわたくしは、茫漠とした退屈に包まれていったのでした。「吾輩ハ猫ニナル」という作品は、この退屈という名の肥沃な土壌から、わたくしの格好の暇つぶしとして生まれたものなのであります。

わたくしは今まで小説を書いたことなどありません。ただ、読むことは好きでした。小説を読み続けるうちに、一度は自分でも書いてみたいと思うようになり、勢いにまかせて